不条理を前に、いま私が考えること
―命の尊厳に思いを寄せて―

大塚 光太郎

（コミュニティ政策学科 2011 年卒業
／コミュニティ福祉学研究科博士課程前期課程 2013 年修了）

みなさん、はじめまして。

冨吉さんよりバトンを繋いでいただいた、大塚光太郎と申します。

今回このような機会をいただき、紙媒体ではありますが、みなさんとつながれることを大変嬉しく思っています。

2019年８月頃のこと。

私は冨吉さんからリレーメッセージのお話をいただきました。

お話をいただいてから「どんなことが書けるといいかなぁ」などとぼんやりとイメージを描き、書く内容をある程度決めて、一年後の提出に備えていました。

そして、一年後の2020年８月。

「何を書いたらいいのやら…」と、戸惑いながらこの原稿を書いている私がいます。

一年前に描いていたことが全く役に立たなくなってしまったかのような…そんな社会の変化の直中にいて、私なりに書くことができる文章を模索しながら、ひとつひとつ、言葉を紡いでいるところです。

私たちは、新型コロナウイルス感染症の発生（以下、コロナ禍と書きます）により、あまりに多くの損失を受け、その現実と向き合い続ける日々を過ごしています。

大学生のみなさんにおかれましては、それぞれの学生生活を謳歌するはずが、大学に通うことはおろか、目に見えない制限にしばられながら、オンライン授業と課題に追われる日々を過ごされてきた（いる）ことと思います。

新入生は大学受験を終えて、いざ、新しい生活のはじまり・新しい出会いを楽しみに待っていたことでしょう。

移動がままならず、そして、容易に集まることができず、就活に戸惑いを覚え

る学生も、サークル活動ができない学生も、卒業旅行ができなくなってしまった学生もいることと思います。

中には、退学せざるを得ないかもしれない…といった窮地に立たされている方もいるかもしれません。

すべての学生がこの状況に圧倒されているわけではなく、ある種、かつての日常にあった苦痛から解放され、安堵に似た感覚を抱いている人もいることと思いますが、コロナ禍によって変わり果てた現実の中で「学生生活」を送るみなさんの痛み（とくくることが相応しいのかすらわからない）を想像し、私自身勝手ながら、胸を痛めています。

その間にも令和２年豪雨災害等の災害が起こり、多くの犠牲者・被害が出てしまうという非常に困難な時代を迎えているように感じています。

もしかしたら、このメッセージをお読みいただいている頃には、それらは落ち着いているかもしれませんし、その反対に…コロナ禍が終息することなく、新しい感染症や災害の発生、経済危機等で、より深刻な状況に立たされるといった想像したくない現実が訪れているのかもわかりません。

…こうした状況の中で、私がみなさんと共有できるものは何かと考えた時、ふたつのことが思い浮かびました。

ひとつは、一年前に書こうと描いていたものと、一年後に実際に書くものとがあまりに異なるように、私たちは「何が起こるかわからない」中で日々を過ごしているようだということ。

もうひとつは、描いていた「学生生活」と、いまの「学生生活」が全く異なってしまっているように、「何が起こるかわからない」中には残念ながら「時に不条理なこともある」ようだということです。

そのことについて、私自身の大学入学から卒業（修了）後の経験をもとに、抽象的ではありますが書かせていただきます。

私は立教大学コミュニティ福祉学部に入学する前に、一年間の浪人生活を経験しました（なお、年齢の逆算は法律で禁止されているようです）。

浪人生活は、予備校に通うだけ、モニター越しの授業を聞いて勉強するだけの日々でした。

しかし、その時期は私に「どんな風に生きていきたいのか」を突きつけ、深く考えさせる時期となりました。

無事に入学をすると、一年入学の時期がずれたことによる出会いによって、今までの自分の人生を肯定してもらえたと感じるようなそんな貴重な経験をさせて

いただきました。

まさか自分が浪人生活を過ごすとは思わず、そしてその時期が、今後のことを深く考えさせる一年になるとは「わかりません」でした。

一年ずれたことによって、自分の人生が肯定される経験ができるなんていうことも「わかりません」でした。

もう少し私の体験について綴らせていただきます。

卒業後、私は立教大学コミュニティ福祉学部の大学院に進学する道を選んだのですが、私の大学卒業と大学院進学のタイミングは2011年でした。

2011年というと、みなさんは小中学生だったでしょうか。

もう少しで「10年」を迎えることになりますが、2011年の３月には、東日本大震災（以下、震災と書きます）という、あまりに「不条理」な出来事が起こりました。

私の代は、震災によって卒業式・入学式共に中止となり、短期間ではありますが大学も一時休校となったかと記憶しています。

私の大学院生活は「大変なことが起こってしまった」という焦燥感と、不穏な空気が日本全体に漂う中ではじまりました。

こんな風に書くと先生方に怒られてしまうかもしれませんが、大学院生活の２年間、私は私自身のやりたいことをやろうとばかり考えていたため、目の前に飛び込んできた「不条理」な出来事に対して向き合いたいと思い、東北に足しげく通わせていただく生活を選択しました。

当時、コミュニティ福祉学部が立ち上げてくださった立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室のメンバーとなり、私は多くの時間を東北の活動に費やしました。

卒業（修了）後は、縁が縁を結び、気が付いたら被災地域に移り住む道を選ぶことになっていました。

移り住んでおよそ８年間、何もできませんでしたが、被災された方々と共に生活をし多くのことを学ばせていただき、いま、その地でコロナ禍を過ごしています。

大学院に進学するときに、震災というあまりに「不条理」な出来事が起こってしまうとは「わかりません」でした。

私のことだけを見て話をさせていただけば、浪人生活で一年入学がずれていたことで、大学院進学のタイミングが2011年と重なり、東北と深く関わることができたと言うことができます。

その結果、被災地域がいまの私の居住地となり、いまこの地でこのような人生を歩むことになるとは「わかりません」でした。

さて、ここまで私の体験について書かせていただいてきましたが、私たちにとってコロナ禍は、こんなことが起こるとは思いもしない「わからない」出来事であり、残念ながら「不条理」なものとして、私たちの前に立ちはだかっていると言えるように思います。

では、私たちはこの中をどう生きていけばいいのでしょう。

正解はわかりませんし、そもそもそんなものはないのかもしれませんが、私が私なりに、何が起こるか「わからない」中でこれまでを生き、震災という「不条理」を全身で感じるうちに至った思いがあります。

それは、「不条理」を前にした時に、それそのもの・それによって起こる出来事・それが問うているものを丁寧に見つめ、自分なりにそれに取り組むことで、次につながる何か大切なものが見えてくるようだ、という思いです。

今回のコロナ禍にもこれが当てはまるかどうかはわかりません。

もしかしたら、この考え方が覆されるような出来事がいつか起こるかもしれません。それでも、いまの私が嘘偽りなくみなさんと共有できるのはこの思いです。

薄っぺらい言葉になってしまいますが、いま、みなさんはコロナ禍という「不条理」を前にして、「学生生活」とは何かを問われているのかもしれません。

「学生生活」のよさや価値を痛感しているのは、他の誰でもないみなさんであり、それを丁寧に見つめ、自分なりに「学生生活」に取り組むことで、もしかしたら何か大切なものが見えてくる…かもしれません。

自身の痛みを周りと比べることなく大切にしてもらい、周りに助けを求めながら、今を丁寧に見つめ、時に疑い、声をあげてもらえたらと思います。

また、災害や緊急事態はいつでも、社会にある課題を噴出させ、分断を加速、そして可視化させます。

社会的弱者とされる人たちはより困難な状況に置かれ、格差はより深刻なものとなりやすく、社会の在り方が問われます。

私たちはその問いかけに対して、自身の当事者性を高め、知恵を出し合って応えていく必要があるわけですが、こういった「不条理」を前に、「命の尊厳」を理念とする学部にみなさんが所属しているということをどうか誇りに思い、その意味を大切にしてほしいと、そんな風に思います。

かく言う私は、現在フリーな立場として、これまでの学びを誇りに思いながら、私なりに今を丁寧に見つめ、言葉を紡ぎ、取り組んでいきたいと考えています。

先が見えない中を、周りに「助けて」と言いながら、自身や他者を労わり堂々と休みながら、思い悩み進んでいけたらと思います。

様々な転機・分岐点にあるこの時代をみなさんとともに生き、それぞれにきっと出会うであろう大切な何かを共有できる時がくる楽しみを傍らに確かに置いて、このメッセージを終えたいと思います。

次回のメッセージは、2015 年卒の君塚直人さんにおつなぎします。

彼は震災の活動をはじめ、学生生活を通じて、様々な学びを得て、自分に正直に歩んでいる人です。

楽しみにしていてください。